

テリー・イーグルトン著 鈴木聡訳
『表象のアイルランド』

紀伊國屋書店

杉浦勉

ケルト図像学からチーフダンスにいたるまで、アイルランドはいまや、この国でまどわれる眼にもあざやかな文化ファッションのトップブランドの地位を占めつつある。『ユリシーズ』を「アイルランド文学」として読む人間は（ボルヘスを「アルゼンチンの作家」だと考える場合と同じように）多くはないにしても、あの国が文化的表象の強力な発信地として認知される状態がきたことは事実である。「ピースクリフと大飢饉」を原題にもつ本書は、錯綜した歴史過程を歩みつつけるアイランドの文学と文化について、英国批評界随一の理論家であるテリー・イーグルトンが、政治経済をはじめとする多元的な領域を横断しつつ、膨大な量の文献資料を駆使して論じつくした、待望の翻訳である。

全体を構成する八つの章は、モダニズム、ナショナリズム、アヴァンギャルド、文化の政治学といった刺激的な主題に貫かれているが、個人的に最も興味をもって読んだのは第二章「アセンダンシーとヘゲモニー」であった。「アセンダンシー」というのは「植民地化された民であると同時に植民地支配者でもある」アングロ・アイリッシュのこと、その定義を巡っては詳細な角度から分析が加えられている。だが彼が本当に魅惑的であるのは、この用語について論じる際に「主観性の構造」である「ヘゲモニー」を中心概念として位置づけるからであり、その理論的前提として登場するのがグラムシである。そしてグラムシの「ヘゲモニー」論に依拠しつつ、「事実確認的なる発話行為」としての「アセンダンシー」を表象する知識人がエドモンド・バークであり、近代英国屈指のイデオログを論じる場面で言及される参照対象がフロイト、ヴィトゲンシュタイン、ガダマーであるとき、本書はその最も輝かしい言説に到達したといえる。彼は、ベンヤミンやヴィトゲンシュタイン、あるいはリチャードソンの小説などを論じたある時期のテクスト群によって、強靱な論理構築力と傑出した批評感覚をもつ存在として

記憶づけられている。しかし私がほどなくして彼の著作から離れてしまったのは、必ずしも本人自身だけでなく、英語圏の批評文化全体の問題と関連があるように思える。今日この領域で強い関心を与える批評家といえ、むしろ非英語圏のエスニシティを持ちつつ英語で書く者たち、スピヴァクやスレーリ、ミンハヤギルロイということになるはずだ（この状況は英国の大衆音楽の現在と似ている）。どうみてもステイニングよりはカリブ系黒人の子孫ロニ・サイズの方が秀れている以上）。イーグルトンに対する関心の低下が、英語圏内部で確実に発生している社会文化的な構造変容と明確に関連づけられるのは分らない。けれど本書における彼の批評言説が、「アイルランド人カトリック教徒としての私の出自」をわざわざ公表しながらも、非英語圏の人間が英語で語ることの分断された差異の意識からの、マイノリティの有色人種として圧倒的な白人社会の制度と文化の負担の下で生きる切実さからはずっと遠く感じられるのを否定することはできない。六百頁をこえる大著を破綻なく移しかえた訳者の力量に感服した。